

2022年03月29日(火)【外為Lab】松田哲

タイトル:【持ち合い相場がブレイクした時】

相場が大きく動いた後の調整局面では、持ち合い相場を形成しやすい。

つまり、一定の値幅の中で、上限と下限をつくり、その範囲内で、何回も上下動を繰り返す値動きが現れます。

持ち合い相場に臨む場合は、「その上限では、売り」「その下限では、買い」を行うことが原則です。

これを「逆張りオペレーション」と呼びます。

しかし、その戦術は、持ち合い相場がブレイクするとき——値動きが、その持ち合い相場を打ち破るとき——に、必ず損失になります。

ですから、持ち合い相場で逆張りオペレーションをする場合は、「逆張りオペで、何往復取れるか」が、重要になります。

つまり、何往復か取れた部分で利益が出て、持ち合い相場がブレイクしたときに損失が出ますから、その積み上げた利益が、ブレイク時に出る損失よりも大きければ、損益がプラスになります。

一般に、ブレイクした後は、一方方向に加速することが多くなり、ブレイク時の値幅の方が大きくなる傾向があります。

つまり、持ち合い相場を形成していた上限と下限の値幅よりも、大きく一方方向に動くことが多い、ということです。

持ち合い相場をブレイクしたとき、その値動きのスピードは速いものです。

特に、その直前まで続いていた持ち合い相場の値動きに慣れている状態では、余計に速く感じられるものです。

ですから、ブレイク時の損失をできる限り小さくすることができるかどうか、勝負の分かれ目になります。

つまり、ブレイク・ポイントを的確に調べて、その外側にストップ・ロス・オーダーを置いておくことです。

せっかく、持ち合い相場で何往復も取れたのに、ブレイク時の損失の方が大きくて、トータルで見ると、損益がマイナスになってしまった、ということが往々にしてあります。

+++++

ブレイク時に損切りができずに、持たされている（保有し続けている）ポジションが、「塩漬ポジション」です。

運がよければ、そういった塩漬ポジションを、うまく料理できることもあるのですが、そうできない場合は、塩漬ポジションが手かせ足かせとなり、最終的に——必ず、と断言していいほど——致命傷になります。

それは、珍しいことではなく、ごく一般的な、ありふれたケースなのです。

外国為替に限らず、株式や商品先物も含めた相場の世界では、必ず、と言っていいほど、数年に何度か巨額の損失がニュースになります。

最近では、損失がよほどの額でない限り、あまりニュースにならないのかもしれませんが、それは、今現在も、水面下では起こっていることです。

これらは、ほぼすべてが、塩漬ポジションから始まっています。

最初の塩漬ポジションは、相対的に見れば、小さかったのです。

しかし、それでも、損切りができなかった。

そして、それを、どうにかしようと、さまざまな努力・工夫をしますが、皮肉なことに損失は拡大を続け、塩漬ポジションは増加の一途をたどります。

そうすると、ますます損切りができなくなります。

それは、ニュースになるくらいですから、いわゆる投資のプロの世界でも起きていることです。

そんなことは氷山の一角に過ぎず、まったく珍しいことでも何でもないのです。

どうにもならない状態になる前に、塩漬ポジションは、処分することです。

「処分をする」とは、勇気をもって損切りを敢行することにほかなりません。

+++++

(2022年03月29日東京時間12:00記述)